佐渡市
博物館研究ノート No.2
令和5年3月30日発行
発行　佐渡市博物館　佐渡市八幡2041

【資料整理から】
開墾師三太夫と開墾鍬

池田哲夫 相羽理恵 貞包健良 平野黎 本間裕德

はじめに

昨年から、新潟大学の博物館学芸員実習の一環として、両津郷土博物館所蔵の未整理資料のカード作成を行ってもらっている。

昨年は9月22～25日の4日間、新潟大学人文学部の飯島康夫、加賀谷真梨、高木大佑の3名の教員の指導のもと、21名の学生が参加して実施した。

昨年はおもに鍬などの農具112点をカード化したが、そのなかに地元で三太夫鍬や新開鍬（しんけいぐわ）などと呼ばれる分厚い鉄製の鍬で、おもに荒地などの開墾に使用された鍬が6点含まれていた。まだ未整理の農具の中にも同種の鍬が多数散見される。不要になった鍬が館に寄贈されたことは予想されるが、同種の鍬が多くあるということは何を示しているのであろうか。

以下、三太夫鍬についてこれまで知り得た情報を記し、今後の資料整理のてがかりとしたい。

開墾師三太夫

三太夫は越後の出身といわれ（山形県酒田、米沢出身説もある）、文化年間(1804～18)に沢根の矢島主計（励風館主で文人）に荒野開拓のための開墾師として招かれた。三太夫は開墾技術の外に焼き物の技術もあり、のぼり窯[1]を築いて瓦や日用雑器を作成していたという。

三太夫について、『佐渡四民風俗』[2]の天保11(1840)年追加の項に「釜屋村に三太夫と申す者有之、親三太夫文化の末、越後より参り住居致し、畑田成、新田畑、溜井等開發方巧者にて、国中被傭歩行、手先の人足も有之、民家是が為に益ある事不少由に御座候」と記されている。

三太夫は文政3(1820)年に釜屋村（秋津）の御林（幕府の直轄林）の払い下げを受け、同地の開墾を行っている。

昭和50(1975)年頃、筆者（池田）は沢根五十里の故土屋弸さんから同地に保管されていたという三太夫が釜屋の開墾にあたり、釜屋村三役人に宛てた以下のような文書のコピーを頂戴している。

相渡申一札之事

一　此度釜屋村字釜屋野与申御林拙者共田地新開発申請度段村方へ談合仕候処村ニテハ自他村方差障モ無之失費等無之可然段申之有難仕合ニ存候　就者村方役目ハ勿論重立之者たり共御公儀様ゟ御召有之願又ハ村方右ニ付入用等相掛候ハハ私共方ゟ取調村方ニ損亡掛ケ申間敷候　扨又開発申彼是引負等出来致候ハハ村方ニ難儀有之候共私共何程成共引請村方江御苦労掛ケ申間敷候為後日一札件仍如

文政 三(1820)辰七月 五十里村　願主　三太夫　釜屋村　同断　五藤左衛門　同断　佐ヱ門　籠米村　同断　新左衛門　同断　忠三郎　釜屋村　三役人衆中

五十里村の三太夫から釜屋村（現在の秋津地区）の村役人に、釜屋野と呼ばれる御林を田畑に開墾させてもらいたいと願い出たものである。

今に残る用具の名称

郷土史家の矢田求は『佐渡方言集』に「さんだいふ　土方業者ノ称。是は文化ノ頃越後カ　坂田辺（ママ）ヨ

[1] 近年小沢窯と名づけられ発掘調査が行われた。窯跡は佐渡市指定記念物：小沢窯として文化財に指定されている。

[2] 宝暦6(1756)年佐渡奉行所在方役高田備寛が奉行命によって島内の各村々の生活ぶりを記述し、これを『佐渡四民風俗』と名づけた。その後天保11(1840)年に、広間役の原田久通が追補した。

リ三太夫ト云ヘルモノ来リテ土方ノ一派ヲ起シヽニ因ムルトイフ」と記している（矢田　1909）。

山本修之助は『佐渡民俗ことば事典』に「三太夫（略）佐渡ではむかし、土方（どかた）のことをいった。これは文化年中、越後か酒田のあたり三太夫という者が渡って来て、土方の一派をおこしたことからこの名があるといわれている。この土方たちが、開墾用に使用したものであろうが新開鍬を、今でも「三太夫鍬」といっているところがある」と記している（山本　1987）。

いずれも三太夫が開墾技術をもった開墾師であったことや、使用した道具の名称が伝えられているとしている。

『両津市誌　町村編上』によれば、文政10(1827)年の三太夫による新田畑の検地に屋敷4反27歩、下畑6反8畝24歩、下々田1反3畝6歩とあるという。

佐渡には、さんだいぐわ（三太夫鍬）、さんでいもっこ（三太夫畚（もっこ））、さんでいぼう（三太夫棒　畚を通して使う棒）、さんでいしごと（三太夫仕事　土方仕事）などという開墾用の道具や名称が残っている。

三太夫と焼き物

三太夫の住居や開墾地は佐渡空港の滑走路の西側にあったといわれ、現在滑走路の一部や雑木林になっている。林の中には三太夫窯跡といわれる場所があり、開墾のかたわら瓦や日用雑器を作成していたといわれ、瓦片やすり鉢片などが見られる。このあたりは新屋ともいわれ、金銀山の衰退にともない江戸後期には奉行所の地役人などがこの地に移り、開拓を進めていたところでもある。

かつて新屋一帯は赤松林であり、表土下には瓦や日用雑器の製造に適した良質の赤土や粘土が得られ、また窯焚きに適した「マツベイタ」の燃料も得られた。三太夫は安政3(1856)年江戸で死去している。その後、血縁者によって窯元を守ろうとしたが成功しなかった。両津郷土博物館付近には、明治～大正頃にかけて地元の人が瓦を焼いた円型の「ぼうず窯」とよばれる窯跡が残っている。

おわりに

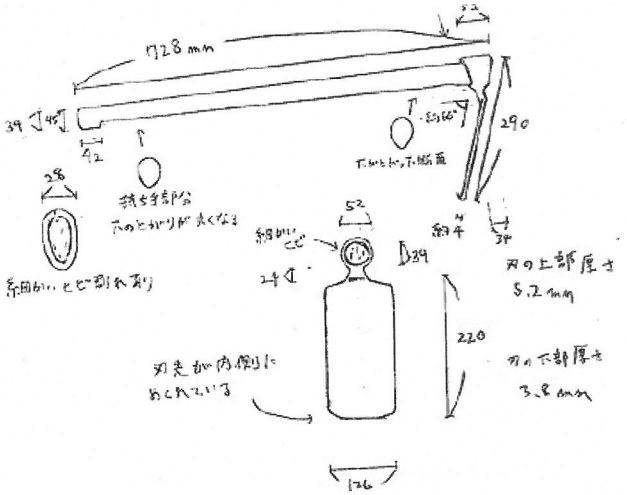
三太夫鍬とよばれる同一名称、同一用途の鍬が同一地域に多数見られる意味はどこにあるのだろうか。

釜屋野は粘土層が地域一帯に広がり、瓦や日用雑器の製造に適した土質であるとともに、火力の強い燃料となる赤松林があることで窯業も可能にさせた。三太夫鍬はこうした地域の開墾には最適な鍬であり、釜屋野のような林地を田畑に開発する開墾鍬として地域一帯に広く流通したものであろう。換言すれば、地域の土壌の特性を生かした生業形態を作り上げるために最適な鍬であったと考えている。

今後、台地の開発と使用する開墾用具の事例を集積し、鍬の形態や地域環境、生業との関わりを地域に即し考察を深めて行きたい。

資料カードの作成にあっては池田雄彦氏から貴重な助言を頂いた。記して感謝申し上げる。

文中差別に関する用語が見られるが、原本の資料的な価値を尊重し原本表記にしたがった。



三太夫鍬　実習生作成の資料カードから（部分）

参考文献

矢田　求　　1909『佐渡方言集』佐渡新聞社
山本修之助　1987『佐渡民俗ことば事典』
佐渡郷土文化の会
両津市誌編さん委員会　1982
『両津市誌町村編上』　両津市役所

【資料紹介】

初代 宮田藍堂 作「斑紫銅勝景文火鉢」

本間 裕徳

はじめに

佐渡の蠟型鋳金は、初代本間琢齋（1811-1891）が佐渡奉行により柏崎から招聘され、大砲を鋳造したことに始まる。琢齋は沢根を中心に美術品の制作に励み、多くの作家が制作活動に勤しんだ[1]。

今回紹介する資料は、佐渡郡長を務めた深井康邦（1868-1947）が佐渡商船株式会社から贈られたもので、深井の子孫により佐渡博物館に寄贈された。資料からは佐渡の蠟型鋳金技術の高さと、金山開発で栄えた相川の江戸期末頃の様子もうかがい知ることもできる資料ではないかと思い、紹介するに至った。

資料概略

資料名　斑紫銅勝景文火鉢

作者　初代 宮田藍堂（1856-1919）

制作年　大正４年か

材質　銅

製法　蠟型鋳造。斑紫銅。

外観　環付。風景画および丸岡南陔の漢詩。高台部に像および狛犬の図柄。

表面

裏面

作者宮田藍堂

本資料は、落款から鋳金家宮田藍堂の作であり、制作年代から初代の作と考える。

初代藍堂は、佐和田生まれ。幼少より初代琢齋に師事し、蠟型鋳造の技術を習得。斑紫銅色や青銅色に妙技を発揮し、優れた作品を発表している[2]。

藍堂落款

本資料が初代の作であると考えるのは、資料に書かれている「大正四年」で、58歳であったと思われる。二代藍堂（1902-1985）も大正期に活躍しているが、帰郷したのが1922年であり、初代藍堂が没して３年後のことである。また、「大正四年」にはまだ12～３歳であり、繊細な蠟型鋳金の作品制作は非常に難しいと思われることから、本資料は「初代藍堂」の作と考える。

外観について

①　製法

本資料は、「斑紫銅」という技法が用いられている。斑紫銅は初代琢齋により伝えられた。研磨した作品をもう一度融解寸前の高温で熱し、火が強く当たったところに紫色の酸化膜を出す技法である。

②　風景画

風景画は、佐渡奉行所付近から見た相川街並みと湾であろうと推測する。佐渡奉行所はと小高いところ（現在の海抜では約41ｍ）に所在し、相川の街並みと湾を一望できる。今でも佐渡奉行所から酷似の地形を見ることができる。

画中には、漢詩にも出てくる「舟」（図１）「鴉」（図２）が描かれている。

図１　柳と舟

図２　鴉

③　丸岡南陔の漢詩

風景画の裏面には丸岡南陔（1823-1886）の七言絶句の漢詩および為書が記されている。

---

[1] 1958年佐々木象堂が人間国宝に認定、佐渡の蠟型鋳金技術は1978年に新潟県無形文化財工芸技術に指定された。

[2] 日英博覧会等各種展覧会、共進会等に出品、受賞も多くある。代表作に聖観音像（赤泊禅長寺）や明治紀念堂の銅碑（金井地区）等がある

寒蘆水落漲痕存
裏柳蕭條悩家竟
渡江呼舟舟未至
帰鴉閃々夕陽村
南陔成章

大正四年十一月
　佐渡商船株式会社
贈
　深井康邦君

藍堂印

漢詩の作者である丸岡南陔は相川生まれ。本名成章。家は代々醤油の醸造業を営み、家督を継ぐが、江戸の昌平黌[3]で学んだ藤木実斎[4]（1824-1859）や、1845年に来島した漢学者 田口江村に学んだ。1867年修教館[5]教授となり、維新後は相川県で学区取締兼教師となり、相川小学校の設立に携わるなど、江戸期末から明治にかけて佐渡の学問に深い関わりを持った人物である。

漢詩は「枯れた蘆（葦）にはたくさんの水が流れた痕があり、裏の柳や蕭の枝が伸び家との境も分らない程になっている。海を渡る舟を呼んでみても届かず、ただ夕陽に照らされた村にカラスが帰っていくだけだ」という意であろうか。南陔が修教館の教授となった年に大政奉還が行なわれ、一時代の幕が下ろされた。詩からは金山の開発に沸いた輝かしい時代の栄華の果てと、時代が変わろうとも変わらない風景の対比が一層もの淋しさを感じさせる。

④　為書について

漢詩の終わりに「大正四年十一月　佐渡商船株式会社　贈　深井康邦君」との為書が書かれている。

深井康邦は、富山市千石町出身で、1907年に佐渡群長として赴任し、1915年に退任するまでの8年間、佐渡の産業発展に尽力した有能な役人である。本資料に書かれている「佐渡商船株式会社」は、現在の佐渡汽船株式会社の前身の会社である。佐渡商船株式会社は、合資会社佐渡汽船商会が株式組織への変更によって設立された会社であり、深井は佐渡汽船商会の設立時に出資するなど大きく関わっている。

為書に記される「大正四年」は深井が佐渡群長を退任した年であり、退任の記念品として本資料が贈呈されたものであろう。なお、本資料のほかに同型で亀田鵬斎（1752-1826）の漢詩（七言律詩）と加茂湖が書かれた火鉢があり、セットで深井に贈呈されている。

おわりに

鋳金作品は昭和初期頃まで贈答品としても広く活用されていた。蠟型鋳金と斑紫銅の組合せは非常に高い技術を駆使し制作されており、当時の制作者の技術の高さに目を引かれる。「実用品」としてだけでなく「美術品」としての価値も劣ることはないであろう。

戦中、多くの銅が徴収され、鋳造品も例外ではなかったといわれている。それでも今日まで生き残った資料・作品を護っていくことは後世の役目であろうと考える。

参考文献

両津市中央公民館 1969『両津町史』
本間周敬 1915『佐渡人名辞書 全』
佐渡博物館 1993
『図説 佐渡島　自然と歴史と文化』
大久保壽ほか 1997『定本 佐渡の美術』
相川町史編纂委員会 2002
『佐渡相川郷土史事典』

3　昌平坂学問所。1790年に神田湯島に設立された江戸幕府直轄の教学機関・施設

4　江戸時代後期の佐渡奉行所地役人。田中葵園の長男。

5　佐渡奉行所地役人田中葵園によって設立された佐渡奉行所付の学問所。

【展示紹介】

佐渡に人が住みはじめたころ
－交流の島　佐渡からの視点－

相羽　理恵

はじめに

令和４年度に担当した佐渡博物館企画展「佐渡に人が住みはじめたころ～縄文の大集落と米づくりの里～」(令和４年12月17日～令和５年３月21日)は、佐渡に人の活動痕跡がはじめてあらわれた縄文時代から農耕が本格的にはじまった弥生・古墳時代に焦点をあて、考古資料をもとに展示･解説したもので、佐渡が時代を問わず「交流の島」であり、多様な生業をもとに人々が暮らしていたことを再確認する機会となった。以下に企画展の概要を記し、佐渡の考古学研究における今後の課題を記す。

はじまりの佐渡人・縄文時代の人々

縄文時代は縄文土器をつくり、狩猟・漁撈・採集を主な生業として生活していた時代で、今から約15,000年前から2,500年前まで10,000年以上続いた[1]食料採集時代として世界的にも注目されている。土器の出現により煮炊きができるようになり、植物質食料の利用の幅が大きく広がり、定住が進んだ時代である。

佐渡で最初に人が住みはじめた確かな証拠といえるものは、岩屋山洞穴遺跡（小木地区）の発掘調査で出土した縄文時代早期（今から約8,000年前）に比定される土器片である[2]。

人々の活動痕跡は南佐渡にまずあらわれ、洞穴や岩陰を利用して狩猟・漁撈・採集活動を展開していたと考えられる。いくらかの空白期を経て、前期末（今から約6,000年前）に国中平野にも遺跡が確認されるようになり､中期に入って徐々に定住が進み、集落を形成するなど活発な活動が見て取れる[3]。

縄文の大集落　長者ヶ平遺跡

長者ヶ平遺跡（小木地区）は、10,000㎡以上の広範囲に展開すること、前期末から後期初頭まで1,000年以上連綿と続くことなどから、佐渡髄一の拠点的集落と評価される遺跡である。昔から土器や石器が多く出土する場所として知られており、２月の山の神のまつりに遺跡で拾った石鏃を神棚に捧げる風習があるほか、長者伝説があることでも知られている[4]。

東北地方南部に分布する大木式土器、現在の山梨県から長野県の中部高地においてみられる有孔鍔付土器、信濃川中流域に分布圏をもつ火炎型土器や、長野県霧ヶ峰産の黒曜石、糸魚川とその周辺地域に分布するヒスイや蛇紋岩を素材とした石器・石製品の出土から、海を越えてさまざまな地域と交流し、人やモノの活発な交流があったことがうかがえる。また、日常生活に直接かかわる「第一の道具」のほかに、祭祀や呪術にかかわる用具、装身具など、「第二の道具」[5]とよばれるものが多数出土している。土偶、石棒や土製耳飾、ヒスイ装飾品など、一見何に使うのかわからないような道具類・装飾品の存在は､祭祀を行っていたことを想起させるものである。

貝塚が語るもの

新潟県には縄文時代の貝塚が14遺跡あり[6]、そのうち佐渡は６遺跡と突出して多い分布を示している。その多くが旧国中湖である国中平野に面する微高地や高台に位置しており、サドシジミを主体とする貝層が見られる。

新潟県指定となっている堂の貝塚（金井地区)、藤塚貝塚（真野地区)、三宮貝塚（畑野地区）では

1　年代観は土器編年や理化学的年代測定などの結果から導き出されるもので、諸説ある。

2　佐渡で旧石器時代・縄文時代草創期に比定される遺物が数点確認されているが（小熊博史・立木宏明1998「佐渡島における縄文時代草創期の遺物」『新潟考古』第９号新潟県考古学会)、出土状況に不明な点があるため今回は扱わなかった。

3　鹿取渉2019「佐渡の縄文遺跡について」『佐渡縄文遺跡展･講演会資料集』佐渡市世界遺産推進課

4　「日没がせまっても田植えが終わらないので、扇をもって太陽を招きかえした。その夜､天変地異で水田が湖と化し､長者が没落した」という類の伝説が全国各地で伝えられている。

5　小林達雄2008『縄文の思考』ちくま新書

6　町田賢一2020「北陸の貝塚」『縄文時代』第31号　縄文時代文化研究会

埋葬人骨が出土しており、堂の貝塚の一体は壮年男性の屈葬、藤塚貝塚は壮年女性の屈葬、三宮貝塚は熟年男性の伸展葬と違いがあるものの、死者を丁重に扱う文化があったことがうかがえる。また、堂の貝塚6号人骨は13本の石鏃とイタチザメの歯を用いた装飾品を伴っているほか、三宮貝塚の人骨には抜歯痕が見られるなど、縄文時代の葬送法、習俗にせまることができる良好な資料が貝塚から得られている[7]。

三宮貝塚は後期初頭にはじまり、晩期まで続く遺跡で、貝塚の規模は90 m× 70mを測る。

調査面積が限られており不明な点が多いものの、馬蹄形の貝の分布やヒスイ大珠、土偶、石棒などの豊富な出土品から、長者ヶ平遺跡が終焉を迎えるころに出現した拠点的集落である可能性がある。

佐渡貝塚遺跡出土遺物
（貝輪・ヒスイ大珠・ヒスイ垂飾・土製耳飾・牙製装飾品）

本格的な農耕のはじまり

弥生時代は本格的な農耕、米づくりが始まった時代で、今から約2,500年前、種子としての米、米づくりの道具、祭祀・儀礼、米の食べ方・作り方などがまとまって大陸から西日本に伝わり、徐々に東へと広がる形で始まった。

佐渡では弥生時代のはじまりに位置づけられる遺跡はほとんど見つかっていない[8]。気候の冷涼化などの要因で縄文時代後期から晩期、弥生時代前期にかけて遺跡が見られなくなるという点では、新潟県や東日本全体の傾向と歩調を一にしている。縄文時代晩期の大集落、新潟県新発田市の青田遺跡や、地表下約2mから縄文時代晩期の土器が発見された二反田遺跡（金井地区）のように、人々の活動痕跡が地中深く眠っている可能性もあり、今後の発見に期待される。

佐渡で弥生時代の活動痕跡が明確に見られるようになるのは中期中葉（今から約2,000年前）からで、緑色凝灰岩（碧玉）、鉄石英（赤玉）、石英などの良質な石材の産出を背景に、国中平野のほとんどの遺跡で細形管玉の玉作が行われ、日本海沿岸や中部高地に供給されている。

米づくりの痕跡が確認できるのは、炭化米が出土した下畑遺跡（畑野地区）や千種遺跡（金井地区）などで、平野の積極的な利用の痕跡が見てとれる。千種遺跡は河川改修工事に伴い、昭和27年に発掘調査が行われた遺跡で、国府川、新保川、大野川の合流地点に、おびただしい数量の土器・石器・木製品・自然遺物が散乱した状態で発見された[9]。近くに営まれていた集落が洪水により流され、堆積した状態で発見されたと推定され、土器や農耕具、たも網枠、櫂、舟形木器などの木製品、イネやモモ、マクワウリ、ユウガオなどの栽培種子が出土している。

千種遺跡北部出土土器群
（新潟県教育委員会 1953『千種』）

7　鹿取 2019 前掲

8　後山遺跡（畑野地区）で弥生時代の初め頃の土器がわずかに見つかっている

9　新潟県教育委員会 1953『千種　新潟県文化財報告第1（考古編）』

卜骨と洞穴遺跡

千種遺跡では、シカの肩甲骨に穿孔を施した卜骨（ぼっこつ）が出土している。卜骨はシカやイノシシの肩甲骨に焼けた棒のようなものをあて、ひび割れの仕方で吉凶を占う朝鮮半島由来の卜占術で、太平洋側の三浦半島の海蝕洞穴や海岸砂丘の遺跡を中心に、海浜部で多く出土しており、海民の習俗とされているものである[10]。浜端洞穴遺跡（相川地区）からはシカとウサギの肩甲骨を使った卜骨が、またセコノ浜洞穴遺跡（両津地区）でも卜骨と推定されているイノシシの肩甲骨が出土しており、日本海側ではきわめて珍しい密な分布を見せている。海を自由に往来し、各地の交易を担う人々、海民が洞穴を利用していたことを想像させるものである。

佐渡における弥生時代の洞穴遺跡は６遺跡を数える[11]。浜端洞穴遺跡では石鏃や貝刃、骨製釣針などの道具のほか、獣骨、魚骨、貝類などの自然遺物等多様な出土品があり、米づくりのみに頼らない、縄文時代から続く狩猟・漁撈・採集活動に比重をおいて暮らす人々の姿がうかがえる。

浜端洞穴遺跡出土　卜骨

まとめにかえて

縄文遺跡の遺構や出土遺物から、豊かな自然を背景に10,000年以上も続いた、世界でもまれな食料採集文化である縄文文化が佐渡でも展開していたことが証明された。

また、縄文時代から弥生時代になり、米づくり中心の生活に急激に移行したわけではなく、畑作、狩猟・漁撈・採集など、様々な生業を組み合わせて生活していたことが千種遺跡や洞穴遺跡の出土品から読み取れた。

さらに、異系統の土器や佐渡以外の産地の石器をはじめとした他文化圏の遺物が、時期を問わず一定量確認できることから、人やモノがさかんに行き来していたことが明らかになった。海は障壁ではなく、船を利用することであらゆる方向へ航行可能であり、海上交通の拠点としての佐渡の優位性が推測された。北前船が日本海を往来する江戸時代を待つまでもなく、佐渡に人々が住み始めた縄文時代から現在まで、海をわたった各地との往来がさかんであったということができ、碧玉・鉄石英製の細形管玉や小泊産の須恵器など、佐渡産の製品が本土で広く使われた時期もあり、佐渡が交流の島であるという側面が、考古学的にも各方面から証明されている[12]。

考古学的な展望と課題

今回の企画展で佐渡の原始古代について見直す機会を得、多くの方から意見をいただく中で、考古学的な課題が明らかになりつつある。以下に私見を述べる。

佐渡における本格的な発掘調査は1952年の千種遺跡にはじまり、三宮貝塚（1961年）、藤塚遺跡（1964・1965年）、堂の貝塚（1969年）、長者ヶ平遺跡（1980～1983年ほか）などの大きな遺跡は、報告書が刊行されてから50年近くが経過している。

遺跡発掘当時の視点で意欲的な調査がなされ、報告書が刊行されているが、その後新潟県各地で資料の蓄積が行われ、多角的な研究が進む中で[13]、新たに得られた知見で遺跡を再精査・再評価することが必要と考える。

千種遺跡の報告書は1953年、新潟県埋蔵文化

10　瀬川拓郎 2017『縄文の思想』講談社現代新書

11　齋藤瑞穂 2013「特論４　洞窟・洞穴・岩陰と弥生時代の人々」『弥生時代のにいがた－時代がかわるとき－』新潟県立歴史博物館

12　橋本博文 2016「考古学からみた佐渡の交流」『人文学研究』第138集　新潟大学人文学部

13　新潟県考古学会 1999『新潟県の考古学』・新潟県考古学会 2019『新潟県の考古学Ⅲ』ほか

財調査報告第１として刊行された。郷土の考古学研究者や大学教授、学生らにより精密な調査、研究成果がまとめられ、その後の報告書の規範となっている[14]。東日本における農耕文化の展開を考えるうえで主要な遺跡に位置づけられるが、遺跡の内容が明らかになっているとはいえない状態である。土器・石器・木製品・卜骨などの骨角製品・自然遺物など、多岐にわたる遺物や遺構を再精査することで、千種遺跡の性格を明らかにすることが可能となるであろう。

また、本格的な発掘調査を行っていない遺跡について、残された遺物や写真、記録から読み取れる情報を丁寧に探っていく必要がある[15]。郷土史家らにより佐渡の各地で収集され、報告されている資料の所在を追跡し、実測などの資料化を進めることで、より実態にせまることができると考える。

各時代で一定量見られる他文化圏の土器についても、新たな視点での再調査が求められる。
例えば北海道の続縄文土器、後北Ｃ～Ｄ式土器は、続縄文時代が外へ向けて積極的に拡散する文化であるとされており、新潟県の上越・中越・下越地方で土器が一定量発見されている。現在の南限は上越地方であるが、同時代の遺跡が多数確認されている佐渡でも発見される可能性が多分にあり注視したい。

同様に、東北地方や北陸地方、中部高地の土器など、他圏の土器や折衷的な土器のほか、石器や木器などを丁寧に観察し、その入り方を注意深く見極める視点が必要となる[16]。

佐渡の考古学の先駆者たちについて、また佐渡考古学研究会や佐渡古代文化研究会の足跡など、佐渡の考古学研究のあゆみを丁寧に追うことも、今後重要になってくると思われる。川上賢吉が主宰した『佐渡史苑』（1927 年第１号発行）、本間嘉晴が『佐渡史学哲学年誌』創刊号（1948 年発行）に掲載した「佐渡先史時代考」をはじめとし、佐渡の考古学研究をリードした地元の研究者の功績をまとめ、収集遺物や写真を調査すること、中央の研究者の来島の足跡、調査の記録をたどることで、佐渡考古学の基礎的研究をふまえた展開が可能となるであろう。

また、昔の佐渡の人々の暮らしをわかりやすく描き出す子ども向け、一般向けの解説書や図録を作成し、佐渡の考古学的な魅力を伝えていくことも、今回の展示で要望の多かったところである。
取り組むべき課題は多く、資料は膨大だが、一歩一歩確実に進むことで、佐渡の物語の一片に光をあてることができれば幸いである。

14　前掲　新潟県教育委員会 1953

15　たとえば浦川遺跡（両津地区）は寺崎裕助氏が指摘するように、能登半島の真脇遺跡にも匹敵する遺跡である可能性がある。（寺崎裕助 2002「縄文時代の佐渡～土器文化の始まり～」『まほろばの時代』両津郷土博物館）

16　石川日出志・鹿取渉 2023「佐渡市平田遺跡の宇津ノ台遺跡」『新潟考古』第 34 号などに詳しい